

## 第2章 ギリシアの都市国家とローマ帝国

### ① ギリシアの都市国家

#### (1) ポリスのおこり

紀元前2000年ごろから、中部ヨーロッパから移住してきた人々が、バルカン半島を南下し、ギリシア各地に定住し始めた。彼らがギリシア人の祖先と言われている。紀元前8世紀になると、山間のあちこちに、貴族の支配する市民共同体の小グループが生まれ、独立した国家を形成した。このような共同体を( **ポリス** ) (=都市国家)という。ポリスは最大時にはおよそ1500あったと推定されている。

#### (2) ポリスのしくみ

ポリスは城壁に囲まれた市街地と、城壁の外側の村落・耕作地・牧草地からなっていた。ポリスの中心には( **アクロポリス** )と呼ばれる小高い丘があり、市民の守護神が祀られているが、戦闘時には城塞になった。アクロポリスのふもとにはアゴラとよばれる広場があり、政治や経済活動の中心となる場であった。市民は共通の宗教意識で結ばれ、強い連帯感を持っていた。そして他のポリスと日常的に戦争を行なっていたので、戦士共同体という性格が強かった。その一方で、ポリス間での経済的・文化的交流も盛んで、同じギリシア人であるという共通意識は強く持っていた。共通の神々と神話を共有し、4年ごとにペロポネソス半島のオリンピアに各ポリスの貴族が集まり、スポーツ競技会( **オリンピア競技** または **オリンピアの祭典** )が行なわれ、競技期間中の三ヶ月はポリス間の戦争も中止されていたことなどからそのことは推測される。

#### (3) ペルシア戦争

紀元前5世紀になると、西アジアを統一した( **ペルシア** )帝国が2度に渡ってギリシアに侵入してきた。ギリシアのポリスは力を合わせて、マラトンの戦い、サラミスの海戦で勝利し、ペルシア軍を撃退し、ポリスの自由と独立を守った。また、この戦争によって、ポリスの中でもアテネ(=アテナイ)の声望が高まった。

#### (4) アテネの民主政治

ペルシア戦争の時、艦船の漕ぎ手として勝利に導いたのが下層市民であった。そのため、戦後、彼らの発言力が強まり、多くの市民が直接政治に参加する( **直接民主制** )の政治形態が実現した。しかし、政治に参加できる権利は男子にのみ与えられ、女性や奴隷には与えられていなかった。奴隷は農耕や手工業などの労働を受け持ち、市民の生活を支えていた。

## (5)ギリシア文化

ギリシアの文化は、市民が対等に議論するポリスの精神風土から育まれたもので、人間的で明るく、合理性と調和を尊重した文化であると言える。ギリシア文化は、今日でもヨーロッパの古典として尊重されている。文学、哲学、自然科学など多方面にわたって、多くの偉人たちの名を挙げることができる。

ジャンル	名前	時代	業績
自然哲学	タレス Thales	前 624 頃～前 546 頃	ギリシア最初の自然哲学者。万物の根源を水と考えた。
	ピタゴラス Pythagoras	前 582 頃～前 497 頃	サモス島出身の自然哲学者。万物の根源を数と考えた。「ピタゴラスの定理」
哲学	プロタゴラス Protagoras	前 485 頃～前 415 頃	「万物の尺度は人間である。」個人の主観が真理の基準で、普遍的真理というものはないとする言葉。
	ソクラテス Sokrates	前 469 頃～前 399 頃	アテネの哲学者。普遍的・客観的真理の存在を主張し、「無知の知」を自覚させることによって、アテネ市民に普遍的真理が存在することを説いた。
	プラトン Platon	前 429～前 347	アテネの哲学者。ソクラテスの弟子。
	アリストテレス Aristoteles	前 384～前 322	スタゲイロス出身の哲学者。アテネでプラトンに学ぶ。「万学の祖」
文学	ホメロス Homeros	紀元前8世紀頃	ギリシア最古の大叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』の作者。
歴史	ヘロドトス Herodotos	前 485 頃～前 425 頃	ハリカルナソス出身の歴史家。ペルシア戦争を描いた『歴史』を著す。「歴史の父」
医学	ヒッポクラテス Hippokrates	前 460 頃～前 375 頃	コス島出身の医者。「医学の父」

## ② アレクサンドロスの帝国

### (1) ギリシアの衰退

紀元前5世紀後半、ギリシア世界の主導権をめぐって、アテネとスパルタの間で戦争が起こった。戦争は長期に渡り、ギリシア全土のポリスをも巻き込んだため、ギリシアの農地は荒廃し、ポリスの機能も上手く働かなくなった。このような状況下の中で、北方の( **マケドニア** )王国がギリシアに勢力をのぼしてきた。紀元前4世紀後半には、ギリシアはマケドニア王国の支配下に入った。マケドニア王( **アレクサンドロス大王** )はペルシア帝国征服のため、東方への遠征を行ない、10年の間に、西はギリシア・エジプトから東はインダス川流域に至る大帝國を築いた。

### (2) ヘレニズム文化

アレクサンドロス大王は都をバビロンに定め、広大な領土の各地にギリシア風の都市を造り、ギリシア語を公用語として、ギリシア文化を普及することに努めた。そのため、ギリシアの文化とオリエントの文化が融合した新しい文化(=ヘレニズム文化)が各地に栄えた。日本の飛鳥・天平時代の文化にもヘレニズム文化の影響が垣間見られる。

ジャンル	名 前	時 代	業 績
自然科学	ユークリッド Eukleides	紀元前 300 頃	ギリシアの数学者。平面幾何学を大成。
	アルキメデス Archimedes	前 287 頃～前 212 頃	シシリア島シラクサ出身の数学・物理学者。浮体の原理、てこの原理を発見。
哲学	ゼノン Zenon	前 469 頃～前 399 頃	キプロス出身の哲学者。ストア派を創始。
	作 品	制作年代	説 明
代表的藝術作品	「ミロのヴィーナス」	前4世紀または前2～1世紀	1820年、ミロ島で発見された、美の女神アフロディテの大理石像。
	「瀕死のガリア人」		小アジアのベルガモンで発見。
	「ラオコーン」		1506年、ローマで発見された。

### ③ローマ帝国

#### (1)共和政ローマのイタリア統一

ギリシアでポリスが栄えていた頃、イタリア半島にも多くの都市国家が誕生していた。そのうち多くの都市国家の中で、( ラテン )人が作ったローマがしだいに強大になっていった。建国当初のローマは王政であったが、紀元前6世紀頃、王を追放して貴族たちによる( 共和政治 )が始まった。共和政治では元老院と呼ばれる300人から成る有力貴族の議会が政治の実権を握っていた。最初は貴族が政権を独占し、平民は政治から締め出されていたが、兵士として働くのは平民であったことから、国防上のことも考えて平民にも政治的権利が与えられるようになった。貴族と平民との身分対立が解消されると、ローマは軍事強国への道を進み、紀元前3世紀にはイタリア半島を統一した。ついで、地中海を征服するために、北アフリカのカルタゴを破り(=ポエニ戦争)、地中海の西側を制圧した。さらに、地中海の東側にも進出し、ギリシア、マケドニア、エジプトなどを征服した。

#### (2)内乱の1世紀

長期間に渡る征服戦争は、必然的に兵士の長期間に渡る従軍を強要した。兵士の身分はローマの平民、つまり農民であったので、長年に渡って農家の主が帰って来ないという状態が続いた。その結果、農地は荒廃し、残された家族は農地を売って日々の生活費を捻出するという事態が通常化した。その一方で、農民が手放した土地を買って私有地を増やしていったのが貴族だった。彼らはその財力にものを言わせ、征服した土地から人々を( 奴隷 )として連れてきた。彼らは「ものをいう道具」として、大農場や鉱山で酷使させられた。そのため奴隷の反乱もしばしば起こり、中でも紀元前73年から紀元前71年に起こったスパルタクスの反乱では、7万人もの奴隷が反乱に加わった。

#### (3)第1次三頭政治

紀元前60年、有力将軍3人の談合が成立し、彼らがローマの政治の実権を掌握した。ポンペイウス(紀元前106頃～紀元前48)とクラッスス(紀元前114頃～紀元前53)と( カエサル ) (紀元前100頃～紀元前44)の3人である。しかし、クラッススが亡くなると、ポンペイウスとカエサルの対立が表立つ。元老院たちはポンペイウスを上手く使い、急速に権力をつけてきたカエサルを排除しようと企むが、逆に、カエサルがポンペイウスを破って事実上の独裁者となる。

#### (4) カエサル暗殺

カエサルがポンペイウス派の残存勢力を一掃するのを見て、元老院の中に、カエサルが王になろうとしているのではないかという疑念が生まれた。疑念はやがて確信となり、紀元前44年、カエサルが元老院の議場に現れると、ブルータス(紀元前85～紀元前42)を中心とする共和政を守ろうとするグループ数十人がカエサルを取り囲み、隠し持っていた短剣で次々とカエサルに襲いかかった。自分を殺そうとする集団の中に可愛がっていたブルータスがいるのを見て、「ブルータス、お前もか」と、言ってカエサルは息絶えた。

#### (5) 第二次三頭政治

カエサルを暗殺した共和政派の人々は、カエサルの死によって共和政治が回復すると考えた。しかし、カエサルの右腕であり兵士たちに人望のあった将軍(アントニウス)が、ブルータスの行為を非難したため、世論もブルータスを責め、ブルータスら共和政派は暗殺者の烙印を押されてしまい失脚する。ブルータスを追い払ったアントニウスは自分こそがカエサルの後継者足る人間だと考えていた。ところが、カエサルは遺言によって自分の全財産を姪の息子の(オクタヴィアヌス)に譲った。これによって、政治はカエサルの財産を相続したオクタヴィアヌスとカエサルの腹心だったアントニウスとカエサルの同僚だったレピドゥスの3人に任された。

#### (6) ローマ帝国の成立

三頭政治はすぐに均衡を失い、ローマの支配は、エジプトを中心とする東地中海地域を治めるアントニウスと西地中海地域を治めるオクタヴィアヌスに二分された。東方に赴いたアントニウスはエジプトのクレオパトラと出会う。クレオパトラはエジプトのためにアントニウスを利用し、共同してオクタヴィアヌスを倒そうとするが、逆に、紀元前31年のアクティウム沖の海戦で、アントニウスとクレオパトラの連合軍はオクタヴィアヌスに敗れ、エジプトはローマの属国となる。そして、紀元前27年、オクタヴィアヌスが全ての政治的権力を掌握し、事実上の帝政を開始する。これ以降を共和政ローマではなくローマ帝国となる。

#### (7) キリスト教の誕生

キリスト教の救世主イエスがイスラエルのベツレヘムで生まれたのは、カエサルがローマを統治していたときのころだった。イエスはヘブライ人(イスラエル人)が信仰するユダヤ教の律法主義(戒律を守る人だけが救われるという考え方)と墮落を批判し、社会的弱者や病人、被差別者などをいたわり癒した。下層民衆の多くがイエスを神が遣わした救世主(メシア)であると信じたが、ユダヤ教の祭司や学者たちはイエスを危険視し、イェルサレム郊外のゴルゴダの

丘で十字架に架け処刑した。しかし、処刑後第3日に、イエスは復活する。イエスは40日間弟子たちの前に現れ、神の国のことを語られた後、彼らの見ている前で天空に上られた。弟子たちは悔い改め、感謝のこころを持って神を敬い、イエスの再臨と神の国の到来をまつ共同体が形成された。これが原始キリスト教の誕生である。その後、弟子たちの布教活動でキリスト教はローマ帝国の内部に深く根をおろすようになり、4世紀末、キリスト教はローマ帝国の国教となった。

## (8)ローマの文化

ローマ帝国はその広大な領土を治めるために様々な( **実用的** )分野の技術が発達した。特に、土木・建築・水道・法律などの領域で目覚ましい発展を遂げた。文学・哲学・美術などの分野ではギリシア文化の影響を強く受け、独自性には欠けるが、後のヨーロッパ文化形成の土台となっている。

ジャンル	名 前	時 代	業 績
人文科学	ウェルギリウス Vergilius	前 70～前 19	大叙事詩『アエネイス』を著す。
	キケロ Cicero	前 106～前 43	共和政末期の政治家、散文家、雄弁家
	セネカ Seneca	前 4 頃～後 65	哲学者。暴君ネロの側近。『怒りについて』『寛容について』など。
	カエサル Caesar	前 100 頃～前 44	『ガリア戦記』はラテン文学の最高峰。
	タキトゥス Tacitus	後 55 頃～後 120 頃	歴史家、政治家。『ゲルマニア』はゲルマン民族誌。
自然科学	プリニウス Plinius	後 23～後 79	将軍で博物学者。『博物誌』
	プトレマイオス Ptolemaios	2世紀頃	天動説を唱える。
	作 品	制作年代	説 明
実用的文化遺産	アッピア街道	紀元前312年のサムニウム戦争中に建設。	石で舗装されたローマ最古の軍用道路。全長540km。
	ガール水道橋	紀元前19年頃。	南フランスのガルドン川(ガール川)に架かる3層構造の橋。全長およそ270m。
	カラカラ浴場	紀元216年開場。	カラカラ帝が作った大公共浴場。1600人を収容できた。
	コロッセウム	ウエスパシアヌス帝～ティトゥス帝の時世の時。	円形闘技場。

## <<< 関連語句 >>>

- パルテノン神殿…アテネのアクロポリスに立つ神殿。
- 民会…アテネの国政の最高機関。18歳以上の成年男子市民で構成されていた。
- アレキサンダー…アレクサンドロスの英語読み。
- ユリウス暦…ユリウス=カエサルが制定した太陽暦。1582年に現行のグレゴリウス暦が制定されるまで使用されていた。
- コロッセウム(コロッセオ)…剣奴の試合などが行なわれたローマの円形闘技場。ティトゥス帝の紀元80年に完成。

## <<< 参考図書 >>>

- 『中学社会 歴史』(平成24年発行 教育出版)
- 『チャート式シリーズ 中学歴史』(新指導要領準拠版 第8刷 平成12年発行 数研出版)
- 『中学総合的研究 社会』(改訂版 平成21年発行 旺文社)
- 『中学社会 自由自在』(改訂第2刷版 平成25年発行 受験研究社)
- 『徹底演習テキスト 中学歴史』(2013年度用 受験研究社)
- 『シリウス21 歴史 I』(育伸社)
- 『中学実力練成テキスト 歴史』(文理)
- 『新中学問題集 歴史 I』(教育開発出版株式会社)
- 『改訂版 詳説世界史研究』木下康彦・木村靖二・吉田寅編 (平成20年発行 山川出版社)
- 『改訂版 世界史®用語集』全国歴史教育研究協議会編 (平成20年発行 山川出版社)
- 『「なぜ？」がわかる 世界史 前近代』浅野典夫著 (2012年発行 学研マーケティング)
- 『ローマ帝国』青柳正規著 (2004年 岩波ジュニア新書)
- 『聖書物語』山形孝夫著 (1982年 岩波ジュニア新書)